

昔話「幽霊の歌」にみる伝承の変容

伊藤龍平

はじめに

よく知られた昔話に「幽霊の歌」と呼ばれる話群がある。一名を「灰の発句」といい、梗概は、上の句を詠んで息絶えた者の亡魂が現世を彷徨つていたのを、主人公が下の句を付けてやることにより成仏させるというものである。ポピュラーな語りでは、旅人は諸国行脚の僧で、歌を詠み損ねた幽霊は先代の住職、舞台は無住の寺とされている。この場合、主人公の僧は幽靈を成仏させたのち、その寺の住職となることが多く、昔話「化物寺」にも通じている。

この話型に解説を施した『日本昔話事典』（昭和52年、弘文堂）では、「おそらく古代の挽歌以来長く日本の信仰を貫いている、歌の靈に対する鎮魂的意義を信ずる社会伝統のもとに生まれてきた話であろう」としている。^{〔1〕}私もこれに同感で、「幽霊の歌」を発生論的に見れば、和歌説話に見られる伝統的な「歌の徳」の発想が、時の推移とともに連歌へと受け継がれ

て生じたものであろう。

文献資料にも同型の話は散見され、それらは一般に「連歌咄」という術語で括られている。著名なものには、小町零落説話の一類に括られる話がある。野晒しにされた小町の髑髏の口ずさむ「秋風の吹く度ごとに穴目／＼」という悲しげな上の句に、在原業平が「小野とはいはじ薄生ひたり」と下の句を付け、弔つたという筋である。御伽草子『小町草紙』として知られる話であるが、もとは『江家次第』や『古事談』『無名抄』等々に載る話で、歌学書の注釈に引用され、有名になつた。「幽霊の歌」がその後裔であるのは疑いない。

ただ、由緒の古いわりに先行研究は少なく、友久武文氏が「連歌咄について」という論文のなかで扱っている程度である。^{〔2〕}その友久氏の論文も昔話における連歌咄を概観したもので、「幽霊の歌」も十二話型ある連歌咄のひとつとして取り上げられてゐるに過ぎない。話を「幽霊の歌」に限るなら、先行研究は皆無といつてよい。この話型の実態すら掴めていないという

のが実状なのである。

本稿の目的のひとつは、現在まで報告されている「幽霊の歌」を分類整理し、見通しをよくすることにある。そうすることにより、□承文芸研究の発展に少しでも寄与したいと思っている。いまひとつの目的は、「幽霊の歌」の語りを通して垣間見られる、伝承の変容について考察することにある。古典的なテーマであるが、昔話の語り手たちの生きた近代という時代背景に自覺的になると、いくぶん新しい見解も提示できるはずである。

一、「連歌咄」分類案

では「幽霊の歌」は、昔話研究史のなかで、どのように位置づけられてきたろうか。少しあ渡いしてみよう。

まず『日本昔話名彙』（昭和2年、日本放送出版協会、以下『名彙』）での扱いであるが、「完形昔話」の「言葉の力」の項に「灰の発句」の題で分類されている。ちなみに、この「言葉の力」の項には、他に「化物問答」「蟹問答」「大工と鬼六」「子守歌内通」「ズイトン坊」等々の話型が振り分けられている。「名彙」で目を引くのは、昔話の型式に関して述べた「昔話の名称・発端・結語など」の項に「連歌咄」の語が見えることである。ここで紹介されているのは、今日の話名でいう「十五夜の餅」だが、特に名称は設けられていない。参考までに記すと、「連歌咄」の前には「年取り話」（年取りの晩にする話、今

日の話名では「大歳の火」「大歳の客」）、後には「狂歌咄」（同じく「標しの餅」）が、それぞれ立項されている。分類の基準に、話の内容と型式とが混用されており、試みとしては失敗しているが、「灰の発句」と「十五夜の餅」を、区別している点に留意したい。

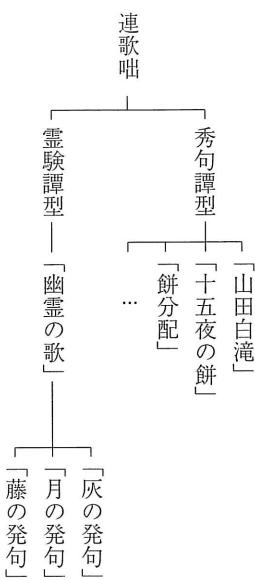
次に『日本昔話集成』（昭和32年、角川書店、以下『集成』）での扱いはというと、一転して「笑話」の「愚人譚」（「愚か嫁」の項に置かれ、話名も「幽霊の歌」と改められている。後に配されているのは「姑の毒殺」と「娶いるか」で、『名彙』とはまったく異なる位置づけがなされているのが判る。『名彙』では別項目に振り分けられていた「十五夜の餅」も「笑話」の「巧智譚」の項に分類されしており、「灰の発句」が「笑話」に分類された理由もおのずと知れよう。なお、この位置づけは『日本昔話大成』（昭和53～55年、角川書店、以下『大成』）においても踏襲されている。

そして『日本昔話通観』（昭和五十二～平成二年、同朋舎、以下『通観』）の「むかし語り」の項では、再び「灰の発句」という話名が用いられているが、話の主題を「言葉の力」に求めた『名彙』とは異なり、「靈魂の働き（死靈）」に位置づけている。同項目には「子育て幽霊」や「枯骨報恩」「産女の力授け」などがある。

このように研究史を振り返ってみると、「幽霊の歌」に限らず、昔話の分類に苦心する先駆たちの姿が見て取れる。分類と

は研究をするうえでの方便にすぎないので、あまり深入りする必要はないが、話名まで揺れているのは具合が悪い。そこで、今後の論の見通しをよくするために、次のような分類を提案してみたい。ただし、この分類案は昔話の連歌咄に限定したもので、文献に記録された連歌咄一般に適用できるものでないことは、はじめに断つておく。

【連歌咄分類案】



私案で連歌咄を秀句譚型と靈驗譚型とに分けているのは、奇怪な「幽靈の歌」を笑話とする『集成』ならびに『大成』の分類の反省からである。軽妙洒脱な「山田白滝」や、「醒睡笑」にも載る由緒正しき「十五夜の餅」を秀句譚とするには異存はなかろう。笑話に分類されるべきは、これら秀句譚型の連歌咄である。

一方、「幽靈の歌」は靈驗譚型の連歌咄に位置づける。歌を

詠みあげて靈を成仏させるというのは歌徳説話に連なる発想で、秀句譚型の話群とは出自が違うのである。両者の境界線が曖昧になるのは分類の常であるが、これで一応の交通整理はできたようだ。

話名の不統一は、「灰の発句」を「幽靈の歌」の下位分類に置くことによって解決する。何となれば、幽靈の詠む歌は大別して三つのパターンがあり、「灰の発句」はその一つに過ぎないからである。

さて、次頁に掲げる表は、手元にある限りの「幽靈の歌」の事例である。不備な点もあるが、これで「幽靈の歌」の概観は掴めたはずである。以下、この表にもとづいて考察を進めていく。なお、昔話資料集の書誌と地域については稿末に示した。

二、「幽靈の歌」三態

三タイプある「幽靈の歌」のうち、もつとも報告例が多いのは、「灰の発句」と呼ばれる話型である。この話名は、幽靈の詠む上の句「灰ならし灰は浜辺の塩に似て」に因っている。話によって語句に異同はあるが、囲炉裏の灰を浜辺に見立てる趣向は一致している。人間の詠む下の句もさまざまであるが、一般的なのは「囲炉裏は海か沖が見ゆるぞ」というものである。「沖」と「燠（おき）（＝燠火）」を掛詞にするのは、和歌においては統的な技巧であった。

留意すべきは、「灰の発句」の幽靈が囲炉裏端に現れることと、幽靈が歌を詠みながら、囲炉裏の灰を灰ならし（灰を寄せたり均したりする道具）、もしくは火箸で搔き混ぜている例が多いことである。ここで火の呪力の延長線上にある灰の呪術性について論ずる余裕はないが⁽³⁾、かつての語りの場が囲炉裏端であつたことを考え併せると、あるいは語り手も幽靈さながらに、灰を搔き混ぜる所作をしてみせたのかもしれない。何しろ昔話が語られるのは、語りのなかの幽靈が出現するのと同じ夜中なのだから、効果は抜群のはずである。今日では窺うべくもないが、語り手の眼前にある現実の囲炉裏と、語りの世界の囲炉裏をオーバーラップさせることができ、この昔話における怪談の技法だったのではないか。仮にそうだとすれば、「灰の発句」は語りの時と場を十二分に生かした昔話であるといえよう。

次に「月の発句」と呼ばれる話型について触れよう。この話名は「蒜山盆地の昔話」（26）において初めて見られ、「大山北麓の昔話」（28）でも踏襲されている。両書を編述した稻田浩二氏が福田晃氏の、いずれかの発案と思われるこの話名は、友久論文でも使用され、それなりに定着しているようなので、本稿でも採択したい。

「月の発句」においては、幽靈が詠むのは下の句（「今宵の月は中空にあり」）のほうである（だから、正確には発句ではない）。対して、主人公が付ける上の句は「宿るべき水は水に閉じられて」。この付合の情趣は、水に映った月を実と見て、

天空に輝く月を虚と見る発想の逆転にある。つまりは氷が張つてゐるために、月が本来あるべき水面に宿ることができずに、中空に浮かんでいるというのである。こう付けることによって、「今宵の月は中空にあり」という当たり前の情景が、興趣の深いものになるわけである。

最後に「藤の発句」と呼び得る話型について触れる。この話名は私の発案である。この型の話でも、幽靈が詠むのは下の句なので、やはり発句とは言えないが、通例にしたがつてこう呼ぶことにする。この話型において、幽靈の詠む句は「下から上へ下がるものかな」、主人公の詠む句は「藤の花水にうつして見る時は」である。水面に映る下がり藤の花を題材にすることにより、「下から上へ下がる」というありえない情景を詠んでみせたわけである。

難題譚の要素の強い話型で、各地の報告例では、連歌咄ではなく、単なる謎話となつてゐるものもある（30・33・34・36）。なかでも「日本の民話」（34）の例は、昔話「ズイトン坊」と接合しており、人々の関心が何処に寄せられていたかが偲ばれよう。付合によつて積年の妄執を解決しようとする「幽靈の歌」には、本質的に謎話と通ずる部分がある。事実、長野県には「下から上へ下がるもの」という謎が報告されている。答えは「水にうつる藤の花」で、件の付合が言葉遊びとしても伝承されていたことが窺える。⁽⁴⁾柳田国男も指摘しているように、炉端は昔話の語りの場であつたのと同時に、言葉遊びの場でも

No. 書名

異類の句

人間の句

生年

「灰の發光句」

| | | | | | | | |
|----|---------------|---------------|-----------------|----------------------|----------------------|------|------|
| 18 | 栗山村の民話 | すねこ・たんぱこ | 灰ならし灰は浜辺の塩に似て | *住職の靈 | ゆるぎは陸か沖は見えるぞ | *行脚僧 | 不明 |
| 17 | 佐渡島昔話集 | 秋田むがしこ | 灰ならし灰は浜辺の塩の水 | *娘の靈 | いろいろは浜で沖は見えるぞ | *六部 | M 43 |
| 16 | 犬に呑まれた嫁 | 角館昔話集 | 灰ならし灰は | *女の靈 | 磯辺の塩に似て囲炉裏が海の陸の上*靈の姉 | 不明 | M 43 |
| 15 | 梁川町史12 | 陸前伊具昔話集 | 灰ならし灰は | 磯辺の塩に似て囲炉裏が海の陸の上*靈の姉 | 不明 | M 13 | M 31 |
| 14 | 奥州東白川の昔話 | 日本民話2 | アクならいアクは浜辺の塩に似て | *住職の靈 | 囲炉裏は海か燎が見えるぞ | *僧侶 | M 42 |
| 13 | とうびんさんすけざるまなぐ | 永浦誠喜翁の昔話 | カキならす灰は浜辺の塩に似て | *大名列の靈 | 波かと聞けば松風の音 | *爺 | M 42 |
| 12 | 大綱むかしむかし | 百一漸 | カキならす灰は海辺の波のよう | *小童の靈 | 火箸の先に爐が見えけり | *物知り | M 42 |
| 11 | おみきばばちやの夜漸 | 羽前の民話 | カキならす灰は海辺の塩に似て | *化物 | 波かと聞けば松風の音 | *物知り | M 42 |
| 10 | 新庄のむかしばなし | むがすむがすずうつとむがす | 灰ならし灰は海辺の潮にけり | *化物 | 火箸の先に爐が見えけり | *物知り | M 42 |
| 9 | 羽前の民話 | 羽前の民話 | 灰ならし灰は海辺の潮にけり | *化物 | 波かと聞けば松風の音 | *物知り | M 42 |
| 8 | 新庄のむかしばなし | 新庄のむかしばなし | 灰ならし灰は海辺の潮にけり | *化物 | 火箸の先に爐が見えけり | *物知り | M 42 |
| 7 | おみきばばちやの夜漸 | 百一漸 | 灰ならし灰は海辺の潮にけり | *化物 | 波かと聞けば松風の音 | *物知り | M 42 |
| 6 | 梁川町史12 | 永浦誠喜翁の昔話 | かきならす灰は海辺の潮にけり | *化物 | 火箸の先に爐が見えけり | *物知り | M 42 |
| 5 | 犬に呑まれた嫁 | 日本民話2 | かきならす灰は海辺の潮にけり | *化物 | 波かと聞けば松風の音 | *物知り | M 42 |
| 4 | 奥州東白川の昔話 | 百一漸 | かきならす灰は海辺の潮にけり | *化物 | 火箸の先に爐が見えけり | *物知り | M 42 |
| 3 | 佐渡島昔話集 | 角館昔話集 | かきならす灰は海辺の潮にけり | *化物 | 火箸の先に爐が見えけり | *物知り | M 42 |
| 2 | 栗山村の民話 | 秋田むがしこ | かきならす灰は海辺の潮にけり | *化物 | 火箸の先に爐が見えけり | *物知り | M 42 |
| 1 | 栗山村の民話 | すねこ・たんぱこ | かきならす灰は海辺の潮にけり | *化物 | 火箸の先に爐が見えけり | *物知り | M 42 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------|---------------------|-------------------|-----------------------|---------------------|----------------------|-------------------|-----------------------|-----------------------|------------------------|-------------------------|----------------------|---------------------|---------------------------|------------------------|---------------------------|--------------------------------|----------------------|---------|
| 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | |
| 砂鉄の村の民話 | 奥備中の昔話 | 日本の民話 | 越中射水の昔話 | 日本の民話4 | 河童火やろう | みちのく2 | 東瀬戸内の昔話 | 大山北麓の昔話 | 佐伯の民話 | 蒜山盆地の昔話 | 会津百話 | 遠野に生きつづけた昔 | 「月の発光句」 | 高知・西土佐村昔話集 | 対馬の昔話 | 直入郡昔話集 | 青谷町の伝承 | 丹波和知の昔話 |
| 下から上に下がるものなり *若者の靈 | 下より上へさがるものなり *幽靈 | 下から上へ下がるもの *古狸 | 藤の花水に写して見る時は *住職の靈 | 下から上にさがるものかな *幽靈 | 藤の花水に写して見る時は *行脚僧 | 下から上へ下がるもの *蓮如 | 藤棚の水に映りし花のかげ *一休 | 藤の花水にうつして見る時は *行脚僧 | 今宵の月は中空にあり *大勢の靈 | 今宵の月は空にこそあり *三人の幽靈 | 蒜山盆地の昔話 *大勢の靈 | 遠野に生きつづけた昔 *住職の靈 | かきならす灰は浜辺の波にさも似たり *鶴の靈 | かきならす灰は浜辺の波に似て *幽靈 | かきならす灰は浜辺の波にさも似たり *鶴の靈 | かきならす灰は浜辺の波に似て *幽靈 | かきならす灰は浜辺の波に似て *婆 | |
| 谷川の渕にうつろう藤の花 *歌の先生 | 池の上の下り藤 *肝のいい人間 | 水に映る藤の花 *行脚僧 | 藤の花水にうつして見る時は *蓮如 | 藤棚の水に映りし花のかげ *一休 | 下から上へ下がりこそすれ *行脚僧 | 下から上へ下がるもの *蓮如 | 藤の花水にうつして見る時は *行脚僧 | 宿るべき水は水に閉じられて *行脚僧 | 宿るべき水は水に閉ざされて *水戸黄門 | 来てみればいつも氷は閉ざされて *行脚僧 | 池水に月が水にとじられて *行脚僧 | 今宵の月は中空にあり *行脚僧 | 遠野に生きつづけた昔 *行脚僧 | 沖なかに火が見える、帆が見える *化物 | 冲が見ゆるぞほのぼのと *行脚僧 | 薰火焚く煙の中にもぼが見える圍炉裏が海か *婆 *忘失 | | |
| M 32 | M 23 | M 22 | M 21 | M 20 | M 19 | M 18 | M 17 | M 16 | M 15 | M 14 | M 13 | M 12 | M 11 | M 10 | M 9 | M 8 | M 7 | |

あつた。⁽⁵⁾

怪談録』『老嫗茶話』が最古である。⁽⁶⁾

以上が昔話「幽靈の歌」の三態である。では、これらの話は文献上、どのくらいまで遡り得るだろうか。

まず「灰の発句」であるが、これは頬原本『俳諧連歌抄』（山崎宗鑑、享錄～天文年間）一五二八、五四の「雑」の部に載る「灰ならす火箸の跡は浜に似て／いるりは舟かおきの見ゆるに」という付合が先例に指摘されている。⁽⁶⁾ これがどういう経路を辿つて在地の伝承として定着したかは知れぬが、『新旧狂哥諧譜聞書』（寛永九年）一六三三以前にも、太閤秀吉と連歌師・玄旨との付合として載せられており、「かきならすはいはしほだのはまならし／いろいろはうみかおきの見ゆるは」、はやくから伝承歌として流布されていたことが判る。⁽⁷⁾ とはい、これらの例は話としての体裁をなしておらず、そういう付合が文献に見られるというだけのことである。今のところ、昔話「灰の発句」と同話と見做せる話は文献には見出せない。

最後に「藤の発句」であるが、これは前二者と較べると格段に新しい。以下に文献の例を二三紹介するが、いずれも近世後期にまでしか遡れない。諸々の事情を鑑みると、「藤の発句」は連歌を種とした「灰の発句」や「月の発句」とは異なり、雑俳から生じた話型であると察せられるが、この点については稿を改めて論じたい。⁽⁸⁾

目についた「藤の発句」の例で最も古いのは、近世後期の奇談集『芭蕉翁行脚怪談袋』（著者不詳）所収の「芭蕉、大内へ上る事」と題された話に見られるものである。⁽⁹⁾ 同書の成立年は不明であるが、安永六年（一七七七）筆の序文を付した諸本がある。この話では、句会で「下より上へつるしさけたり」という題を出された芭蕉が、「風鈴の思わずみる手水鉢」と付けている。藤の花と風鈴の違いはあるものの、矛盾命題の下の句を、水に映つた風物を詠むことによつて解決しているのは、同じ趣向にもとづいている。ただ、この話が「藤の発句」のような怪談ではなく、芭蕉の頓才を讃えた秀句譚であったのは、見落としがたい相違点であつた。

その意味では、『列国奇談聞書帖』（十返舎一九、享和二年）一八〇二の例のほうが、靈験譚型連歌咄としての体裁を整えている点で、現行の昔話「幽靈の歌」に近い。⁽¹⁰⁾ 題は「黒河の怪異」といい、幽靈の詠む下の句「下へ／＼とのぼりこそすれ」に、主人公の行脚僧が「峯越へて都へいそぐ九折」と上の句を

付けて成仏させている。その心は、「峯越へて」という言葉から下山していることが判るが、一方、「都へいそぐ」とあることから行き先は都であることも判り、その結果、「下へ／＼とのぼりこそすれ」となるわけである。この付合は他に例を見ないが、なかなか上手に出来ている。

文献からもう一例。次に紹介する『寒繁瓈綴』（浅野梅堂、幕末頃）の話で、主人公は連歌師の飯尾宗祇となつていている。⁽¹³⁾

俗ニ語リツタウル宗祇法師廻国ノ時、アル廢寺ニ宿シケルガ、伝イフコノ寺ノ僧連歌ヲメデ、一日下ナルモノニ上ヘサガレバ、トイフ句ヲ得テ、ソレヲ附ワヅライテツヒニ空シケナリケル。妄想ノコリテヨナヨナ怪ラナスヨシヲキ、テ、夜ノフクルヲマチテ居タルニ、一堂クワツト明ルクナリケレバ、桐燈臺トコロドコロニトボシツレテ、文臺ノモトニ色クロク瘦サラバヒタル僧、衆ニムカヒテコノ句ヲタカラカニ吟ズルヨリ、宗祇フスマヲ隔テ、藤ナミノウツロウ水ノ清クシテ^{清クシテ、本影スミテ二作ルセアリ}ト吟ジケレバ、大叫一声シテ其怪消滅シテ再ビ出ズトナン。

ここで気になるのは、話に登場する幽靈が一人であつたか、複数であつたか、ということである。突飛な物言いのようだが、これは昔話「幽靈の歌」を考える際に看過できない問題である。何故なら、そこに語り手たちの生きた近代という時代が仄見えるからである。

幽靈が一人の場合、彼が詠もうとしていたのは三十一文字の短歌であったということになる。当然、主人公である旅僧が成仏させたのは、あくまでも個人の妄執であつた。対して、幽靈が複数である場合、彼らが目指していたのは、連歌もしくは連句という「座の文芸」における作品の完結であり、主人公が成仏させたのもその座に列席していた者すべての妄執ということになる。

たとえば『会津怪談録』には、「新町化物の事」と題して「月の発句」と同じ型の話が載せられている。⁽¹⁴⁾本書が成立した当时、後藤良右衛門なる藩士の住んでいた侍屋敷にまつわる話で、世間話もしくは伝説としての色彩が強い。そこでは「連歌を会して遊び……」と明記されており、近世後期の会津城下に

い。そして『寒繁瓈綴』の成立した幕末期は、昔話集の有力な語り手たちの生まれた時期でもあった。この点を踏まえたうえで、次の問題に移りたい。

三、幽靈は連歌を詠んだか

おいては、この話が字義通りの連歌咄であつたことが判る。

その会津地方の昔話を蒐集した『会津百話』にも「月の発句」が報告されているので、次に紹介して『会津怪談録』と比較してみよう。引用は、幽靈が主人公によつて成仏させられる場面である。

そして座つていたら、一人はまあ医者のような人が来たつて。そして一人はその山寺の主みたいな人が來たつて。そして今度、いま一人は法印様のような人が來たつて。「どなたもお早よう」つて。その和尚は黙つて見ていたつて。「今夜も始めましょう」つて。黙つて聞いていてやつたつて。そうしたら「今宵の月は空に」つていうんだつて、一人が。そうしたらまた別の「今宵の月は空にこそあり」つて言つて、また三人が同じに、「今宵の月は空にこそあり」つて言つんだつて。これは上の句ができなくて出ただな、と思って、和尚様が上の文句をくつつけたつて。「池水に月が氷にとじられて」そうしたら三人が「ハッ！」つ言つて消えてしまつたつて。

本話において山寺に現れるのは、「医者のような人」「山寺の主みたいな人」「法印様のような人」の三人である。後の展開から、句を付けられずに思い悩んでいるのは、三人全員であることが判る。また、幽靈たちが詠んだのが上の句ではなく、下

の句である点にも注意を払う必要がある。これは通常の短歌の創作順序に反している。以上の二点から判るように、幽靈たちは明らかに連歌を詠んでいる。この点は、近世の『会津怪談録』の話と同じである。

けれども、語り手の言葉には、どこにも「連歌」という語はない。さらに言えば、現在報告されている「幽靈の歌」で語り手が「連歌」という語を使つた例は一例もないものである。

考えてみれば、無理もないことである。表に示した通り「幽靈の歌」の語り手たちの生年は明治から大正にかけてである。この時代、連歌はすでに過去の芸術であつたし、近代俳句へと変貌した俳諧においても連句は省みられなくなつていた。そうした時代を生きた語り手たちが、幽靈たちの集まりを連歌の会と認識できなかつたのは当然至極である。衰退しつつも、いまだ連歌の命脈の保たれていた近世の『会津怪談録』のころとは違うのである。連歌咄という語は、文学者である柳田の編纂した『名彙』にしか見られない呼称である。

試みに、『会津百話』以外の「月の発句」における幽靈の登場する箇所を見てみよう。

そこに大勢、なんだか坊さんだか侍だか、なんだか知らんような者が、その庭に、大勢庭にこうにいおつて、空あ眺めては思案をし、空あ眺めては思案をしいして（……中略……）真中へ一人坊さんだらうかと思う人が、そこへ一

人聴えて見える。それが、のって見て、「今宵の月は中空にあり」ということを言うて思案にくれとる。

(26)『蒜山盆地の昔話』

そのうち、一人出、二人出、三人出して、大きな広間は、幽靈で一杯になつた。侍の幽靈もおりやあ、坊さんの幽靈もおるし、若い者のもおる。その幽靈が、何やら、「うじやうじや、うじやうじや」歌よう。何を歌よんじやろか」と思つて、耳をすまして、聞いとつたらな、

「今宵の月は中空にあり、今宵の月は中空にあり」

(27)『佐伯の民話』

まあ、丑三の頃になつたら、その寺の本堂で、いろいろ人が、話をしよう。侍もある。和尚さんもある。いろいろ集まつて、「こよいの月は中空にあり。はてな」つて。またある人が、「こよいの月は中空にあり。はてな」つて、困つてしまつておる姿が出て（……以下略）。

(28)『大山北麓の昔話』

静かあなたお寺ですのにな、夜中がくると、ガサゴソ、ガサゴソ、音がすんですと。そおつとのぞいてみましたら、裏の奥の庫裏のほうでね、ずうつと人が並んどんですと。

そして「はてな、はてな」言よる。「今宵の月は中空にあり」という歌が出されて、それに上の句をつけえ」言よんですと。

(29)『東瀬戸内の昔話』

これらの話に登場した幽靈はいずれも複数で、おしなべて連歌の会にいた者たちと覚しい。「月の発句」で幽靈が一人であるのは、「遠野に生きづけた昔」のみである。⁽¹⁵⁾けれども、語り手は誰一人そこで詠まれたのが連歌であるとは認識していない。そして、おそらくは（調査者を含めた）昔話の聞き手も、これが連歌の会の光景であるとは気づかなかつたであろう。近代を生きた語り手や聴き手たちにとって、昔話「幽靈の歌」は詠みかけの短歌を完成させる話として受けとめられていたのである。連歌ならびに連句の衰微したのちも、短歌は近代文学の装いをまとつて生き延びていた。

さて、三十一文字の短歌を詠みかけて死んだという解釈ならば、べつに幽靈の詠む歌が上の句で切れていなくてもよいわけである。

たとえば『角館昔話集』(3)の「灰の発句」の例では、幽靈が詠むのは第二句の途中「灰ならし灰は」までで、その続きを主人公が詠み繼いでいる。話者の長谷川ヤエ子は、同話を語つた昭和十年当時、尋常小学校六年生であった。彼女はもちろん、彼女に昔話を語つた人にも連歌の知識は皆無であつたろう。事実、語りのなかで、この幽靈は生前「歌詠みの名人」であつ

たとされている。その結果、幽靈の歌が上の句の途中で切れるという妙な事態になってしまった。

また『河童火やろう』(31)の「藤の発句」の例では、幽靈が上の句「藤の花水に写して見る時は」を、主人公が下の句「下から上へさがりこそそれ」を詠んでおり、通例と逆である。「藤の発句」の面白さは、幽靈の出した難題を主人公が解くところにあるのに、幽靈のほうが答えに相当する上の句を詠んでしまっては、興味めまいどころである。話の構成としては明らかに破綻をきたしている。おそらく、連歌に関する知識のな

かつた語り手にとって、下の句が上の句より先にくることが自然に思えたのである。この幽靈は主人公の旅僧に「わあは歌は好きだつたが、下の句が出来ねえかー、頭のわりことを悲観して自殺したのだ」と話しかけている。登場人物ですら、みずからの営為を連歌と認識していないのである。これらの事例は、連歌を解せぬ時代を生きた語り手たちの解釈が、話の内容にまで影響を及ぼした好例といえよう。

おわりに

昔話に限らず、これまで口承文芸における伝承の変容というと、話の内容の変容を指すのが常であった。それは誰の目にも明らかな、判りやすい変容である。しかしながら、本稿で取り上げた「幽靈の歌」の例のように、話の内容そのものに変化が

なくとも、話を伝承する者的心持ちに変化が見られるのならば、やはりそれも伝承の変容のひとつの形と捉えるべきであろう。その種の変容は、時として話の内容に及ぶこともあるが、大概は語り手、もしくは聴き手の心の内にとどまり、表面に現れることは稀である。何しろ語り手も聴き手も、時には調査者すらも、自身の昔話の解釈が変容していることを自覚していないのである。その意味では、これが極めて扱いづらい問題であるのは事実である。

さらに厄介なことに、たとえ心持ちの変容が話の表面に現れようとも、それは話型の枠からこぼれ落ちていている場合が多いのである。本稿で取り上げた『角館昔話集』や『河童火やろう』の例も、もし梗概化したならば、既存の「幽靈の歌」の話型と同じになるだろう。

したがつて、この種の変容を見極めるには、フィールドで語られる昔話を丹念に聞き、資料集に報告された昔話を丁寧に読むこと以外に手はない。骨の折れる作業であるが、そこから紡ぎだされる問題は、けつして等閑に付すことのできないものである。何故なら、昔話と語り手もしくは聴き手の間にある距離感と、その距離感から生ずる昔話の誤説こそが、既存の話に新たな生命を吹き込み、語り継いでいく動機になったと思われるからである。敷衍して考えるに、かような事態は、いつの時代にも起こり得たものであろう。かつて連歌咄であつた「幽靈の歌」が、連歌が滅びたのちも語り継がれていたことなども、

その些細なる例に過ぎない。

註・参考文献

- (1) 文責は津田孝司氏。
- (2) 『日本昔話研究集成』第5巻 昭和59年、名著出版
- (3) たとえば『日本民俗大事典』下巻(平成12年、吉川弘文館)の「灰」の項には「圍炉裏や竈の火は神聖視され、その火から生まれた灰も特別な力があると考えられてきた。昔話に出てくる灰も、主人公に幸福をもたらすような不思議な力を持つものとして描かれていることが多い」(文責・山崎裕子氏)として、「花咲爺」「灰坊太郎」の二話型と、難題譚にみられる「灰の縄」のモチーフを例に挙げている。また、一般書ではあるが、小泉武夫氏の『灰に謎あり』(平成10年、NTT出版)では灰に関する蘊蓄が傾けられており、「昔嘗と灰」という章段もある。ただし「灰の発句」については触れられていない。
- (4) 鈴木栄三編『新編ことば遊び辞典』昭和56年、東京堂
- (5) 『なぞことわざ』(昭和27年、筑摩書房)に「炉端と謎」の項がある。
- (6) 前掲、友久論文(註2)にある指摘。
- (7) 鈴木栄三校注『犬づくば集』(昭和40年、角川書店)
- (8) 前掲、友久論文(註2)にある指摘。
- (9) もつとも『老嫗茶話』で「月の発句」を収録しているの項がある。
- (10) は、『若松市史』(昭和16年)収録の諸本のみである。ただし「灰の発句」や「月の発句」も、近世後期を生きた語り手たち(つまり本稿で提示した表の語り手たちが、聴き手であった頃の語り手たち)にとっては、当時流行っていた雜俳をめぐる話として受け取られていた可能性が高い。雜俳と本話型との関わりは今後の課題である。
- (11) 『文学研究科論集』第28号(國學院大學大学院文学研究科平成13年)掲載の翻刻資料を参照のこと。
- (12) 棚橋正博編『十返舎一九集』平成9年、国書刊行会
- (13) 『続日本隨筆大成』第3巻、昭和54年、吉川弘文館
- (14) 『会津怪談録』は喜多方市在住の若菜邦雄氏の書架に蔵されていた写本で、ほかに伝本を見ない。同書は川口芳昭氏により現代語訳されており(『会津ふるさと夜話』第2巻、昭和53年、歴史春秋社)、私は川口氏のご教示により閲覧の機会を得た。ここに記して感謝の意を表したい。
- (15) なお、複数の幽靈が出るのは、三タイプある「幽靈の歌」のなかでも「月の発句」の型にのみ顯著である。この点を鑑みると、語の厳密な意味において「連歌咄」と言い得るのは、「月の発句」のみであったといえよう。

〈昔話資料集書誌〉

1 平野直、昭和18年、有光社(岩手)

2 今村義孝・泰子、昭和43年、未来社(秋田)

- 3 武藤鉄城、昭和50年、岩崎美術社（秋田）
- ※初出＝『昔話研究』第1巻第11号 昭和11年
- 4 山本明、昭和56年、岩崎美術社（宮城）
- 5 加藤瑞子・佐々木徳夫、昭和53年、ぎょうせい（宮城）
- 6 佐々木徳夫、昭和50年、日本放送出版協会（宮城）
- 7 佐々木徳夫、昭和61年、ひかり書房（宮城）
- 8 小野和子、平成10年、みやぎ民話の会（宮城）
- 9 武田正、昭和48年、日本放送出版協会（山形）
- 10 大友儀助、昭和46年、新庄市教育委員会（山形）
- 11 田島房子、昭和63年、講談社出版サービスセンター（山形）
- 12 佐藤玄祐、昭和41年、大網中学校郷土研究クラブ（山形）
- 13 立石憲利、昭和53年（山形）
- 14 東京女子大学民俗調査団、昭和45年（福島）
- 15 柳川町、昭和54年（福島）
- 16 伊藤太郎、昭和48年、巻町役場（新潟）
- 17 鈴木棠三、昭和17年、三省堂（新潟）
- 18 栗山村教育委員会、昭和57年（栃木）
- 19 稲田浩二、昭和46年、三弥井書店（京都）
- 20 鈴木清美、昭和18年、三省堂（大分）
- 21 宮本正興・山中耕作、昭和53年、日本放送出版協会（長崎）
- 22 立命館大学説話文学研究会、昭和58年（高知）
- 23 22 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24
- ※初出＝『伊具郷土』第4巻、昭和19年
- 佐々木徳夫、昭和50年、講談社（岩手）
- 國學院大學説話研究会、昭和50年、桜楓社（福島）
- 稻田浩二・福田晃、昭和45年、三弥井書店（岡山）
- 佐伯町民話研究会、昭和60年（岡山）
- 稻田浩二・福田晃、昭和45年、三弥井書店（鳥取）
- 柴口成浩ほか、昭和50年、日本放送出版協会（香川）
- 本城屋勝ほか、昭和54年、みしま書房（秋田）
- 石川純一郎、昭和47年、桜楓社（福島）
- 谷本尚史・梶谷明・丸山久子、昭和54年、ぎょうせい（群馬）
- 伊藤曙覽、昭和46年、三弥井書店（富山）
- 沖野皓一・加納妙子、昭和53年、ぎょうせい（岐阜）
- 稻田浩二・立石憲利、昭和48年、三弥井書店（岡山）
- 立石憲利、昭和60年、手帖社（岡山）
- （いとう・りょうへい／國學院大學大学院）